

学びのきっかけと深化について探る

水落あき子（上越市立春日小学校）

要約

本研究の目的は、子どもが友達の学びとの関わりの中で自らの学びを発展・深化させていく仕組みを2つの学習過程の分析から明らかにすることである。

一つ目の学習過程は友達の学びに出会い、課題意識をもつ過程、二つ目は課題意識をもった子どもが友達の学びとの関わりで学びを構築していく過程である。

これら二つの学習過程での子どもの学びを感情反応（情動）を手がかりに分析を進めていくことから次のことが明らかになってきた。

それは、友達の学びとの出会いにより自らの課題が明確になっていくことや課題意識をもった子どもが友達の学びから解決の糸口を見つけていることである。そして、友達の、人や物との関わり方から必要なことを採り入れ再構築してだけでなく関わり方そのものも学ぼうとしているという学びの在りようも見えてきた。

キーワード： 課題意識 感情反応（情動） 関わりから学ぶ 関わり方を学ぶ

研究の背景と目的

子どもにできるだけ多くの教育的機会を与えることが大切とされているが、ここでいう「機会」とは、何を指すのだろうか。

ここで、注目すべき視点は、人との出会い、関わりから得られる教育的効果であろう。それは、いくら豊富に物的な教材・教具を与えてもそれに関わる「人」抜きでは、生き方につながる学びは期待できないと考えられるからである。

子どもは、日々直面する課題を今まで学んだことを総動員し、新しい情報を集め、それらから必要なものを選び再構築することで課題解決の方法を見出していく。その過程では、自分の中に判断する基準をもつことが重要となる。この「判断」について、川喜田¹⁾（1997）は創造性教育の必要性を説く中で「とくに欠けているのは、『判断』の過程で、どうしたらよいのか、生活の現実の場から生々しい情報を集め、組み立てる能力である」と述べている。佐伯²⁾（1993）は、何が必要かを友達の学びから判断し課題を解決していくというプロセスを繰り返す中で子どもはよりよいものをつくり出してい

く学びを、トマセロ（M.Tomasello 1993）の論を引用し、文化的学習としている。また、文化的学習が発展し「他者と協同して、自分だけではできないことをする」学習を協同的学習としている。

私は、この、自ら判断しよりよく生きようとする学びを「創造的な学び」ととらえ、子どもの感情反応を手がかりに実現のための仕組みを明らかにしたい。

創造的な学びの場では、子どものもつ考えや思い、願いが自由に交換・共有できることが前提となり、それを保障することが教師の大きな役目となる。

桐生³⁾（2002）は「子どもたちに課題を与え、自由な活動を保障した時、課題と無関係な会話を含みながら、質の高い学びへと変化する」と述べ、水落⁴⁾（2003）は「学習状況の可視化」という点から、考え・思いが自由に交換・共有できることによる学習効果について述べている。

本研究では次の2点を目的とする。

1) 子どもが「待っている」時間に起きている学びの様子を観察し、そこでの課題意識の萌芽

を感情反応（情動）を手がかりにして探る。

2) 課題意識をもった子どもが自分の学びを構築していくとき、友達の学びがどのように影響しているかを行動分析により明らかにする。

研究を進めていく中で、子どもが子どもの学び姿から自身の学びのあり様を模索し、よりよく生きようとする事ができるような学習の場のあり方を考えていきたい。

調査について

新潟の小学校5年生が沖縄県内小学校児童とテレビ電話を使って交信するまでの学習の様子を観察した。

1. 目的

- ・児童 A の学びの姿を中心に観察しながら学級全体の学びの広がりを見ていく。
- ・友達の発表リハーサルの様子を見ている子どもの動きを観察し、学びのきっかけや発展する様子を明らかにする。

2. 被調査者

新潟市内 B 小学校 5 年生 1 クラス (37 人)

3. 調査期間

2003 年 11 月中

4. 調査単元

5 年・社会科「くらしをささえる情報」

第 1 次【2 時間】:「ニュース番組をつくる人たちの工夫」についてレポートにまとめる。

第 2 次【1 時間】: 個人のレポートについてニュースを伝えるアナウンサーになったつもりで発表する。班代表者が学級全体の前で発表する。

第 3 次【2 時間】:「情報の発信者として」沖縄県久米島の小学校に新潟県（新潟市）のことを調べ発表するための練習とリハーサル。

第 4 次【2 時間】: 手直しして 2 回目のリハーサル。

第 5 次【2 時間】: 本番

5. 記録・分析

ビデオカメラ 3 台から 4 台で撮影し、行動分析・会話分析を行った。

（教室全体を撮影する固定カメラ 1 台、手持ちカメラ 1 台、特定の班に固定カメラ 1 台から 2 台）

再生刺激法によるインタビューにより行動や会話の意味について明らかにした。

結果

児童 A は第 2 次で、自分が発表する前に別の班の発表を様々な反応を示しながら見ている。この反応と友達の発表の様子との関わりから A は自分の発表のとき、前の班の発表で大きく反応したものを採り入れていることが明らかになった。A の反応は A に限られたものではなく、学級全体でも同様の反応と学びの広がりが見られた。

また、第 3 次のリハーサルでは、友達の発表の様子を見ている子どもの反応にいくつかの特徴があり、その反応の特徴から、次の学習への取り組み方に違いが出てきた。

これらの結果から、課題意識がどのように生まれたのか、また、課題を解決する中で次の学習へとどのようにつながっていくのかが少しずつ明らかになってきた。

引用文献

- 1) 川喜田 二郎「川喜田 二郎著作集創造と伝統」中央公論社 1997 p.602
- 2) 佐伯 胖「『学ぶ』ということの意味」岩波書店 1995 p.86,87,93
- 3) 桐生 徹・西川 純「異年齢学習形態における学びの成立に関する研究」臨床教科教育学会誌 vol.1 2002
- 4) 水落 芳明「相互作用によるメディアリテラシーの発展に関する臨床的研究」上越教育大学修士論文（2003）p.63